

『維摩經玄疏』 訳注 (6)

菅野博史

本訳注は、『維摩經玄疏』 訳注 (一) (『大倉山論集』 40、1996.12、235-261)、『維摩經玄疏』 訳注 (二) (『大倉山論集』 45、1999.3、297-316)、『維摩經玄疏』 訳注 (三) (『多田孝文名誉教授古稀記念論文集 東洋の慈悲と智慧』 所収、33-54、山喜房仏書林、2013.3)、『維摩經玄疏』 訳注 (4) (『創価大学人文論集』 29、2017.3、33-72)、『維摩經玄疏』 訳注 (5) (『創価大学人文論集』 30、2018.3、61-84) の続編である。創価大学大学院の授業で、院生と『維摩經玄疏』 を一緒に読んでいる。参加者は、大津健一、野原耕平、石田幸司、藤村光一、泉健一の五氏である。なお、本稿の校正については、横溝靖彦修士のご協力を受けた。記して感謝の意を表する。

参考までに、『維摩經玄疏』 卷第三の科文を下に示す。今回の範囲は、卷第三の終わりまでである。科文表については、今回の部分をゴチックで示す。科文において、「項」の下の層については、算用数字を用いる。科文の名称については、テキストの箇所によって若干の表現の相違が見られるので、適宜処理する。科文の名称の後の () に、大正蔵卷第 38 の頁・段・行を挿入する。

翻訳部分に、大正蔵卷第 38 の頁・段を挿入する。

注のなかの引用典拠については、CBETA を利用する。ただし、漢字は常用字体を用い、句読点は改める。『大日本統蔵經』 については、『新纂大日本統蔵經』 を使用し、略号を X とする。

『維摩經玄疏』 科文

『維摩經玄疏』 卷第三

- 3. 四教分別を明かす (532b5)
- 3.1 四教の名を釈す (532b16)
- 3.2 所詮を辨ず (534a20)
- 3.21 四諦の理に約して所詮を明かす (534b2)
- 3.211 所詮の四諦の理を明かす (534b3)
- 3.212 能詮の教を明かす (534b6)
- 3.213 經論に対するを明かす (534b9)
- 3.2131 經に対す (534b10)
- 3.2132 論に対す (534b16)
- 3.22 三諦の理に約して四教の所詮の理を明かす (534c17)
- 3.221 三諦の所詮の理を明かす (534c19)
- 3.222 能詮の四教を明かす (534c27)
- 3.223 經論に対するを明かす (535a5)
- 3.23 二諦の理に約して所詮を明かす (535a16)
- 3.231 正しく所詮の理を明かす (535a17)
- 3.232 能詮の四教を明かす (535a28)
- 3.233 經論に対す (535b2)
- 3.24 一諦の理に約して所詮の理を明かす (535b12)
- 3.241 正しく所詮の理を明かす (535b13)
- 3.242 能詮の四教を明かす (535b24)
- 3.243 經論に対す (535b28)
- 3.3 四教の位に約して淨無垢稱の位を分別す (535c18)
- 3.31 三藏教に約して淨無垢稱の義を明かす (535c22)
- 3.311 略して三乘を開く (535c28)
- 3.312 三藏教の菩薩の位を明かす (536a20)

- 3.3121 菩提心を発す (536a23)
- 3.3122 菩薩道を行ず (536a28)
- 3.3123 三十二相の業を種う (536b16)
- 3.3124 六度成満 (536b19)
- 3.3125 一生補処 (536c8)
- 3.3126 兜率陀天に生ず (536c11)
- 3.3127 八相成道 (536c16)
- 3.313 三蔵教の位に約して浄無垢称の義を釈す (537a3)
- 3.32 通教に約して浄無垢称の義を明かす (537a22)
- 3.321 通教に約して三乗を開く (537a27)
- 3.322 通教の三乗の位を明かす (537b12)
- 3.3221 三乗共の十地を明かす (537b13)
- 3.32211 名を標す (537b14)
- 3.32212 略して解釈す (537b19)
- 3.322121 乾慧地 (537b19)
- 3.322122 性地 (537c3)
- 3.322123 八人地 (537c6)
- 3.322124 見地 (537c8)
- 3.322125 薄地 (537c10)
- 3.322126 離欲地 (537c12)
- 3.322127 已辦地 (537c14)
- 3.322128 辟支仏地 (537c16)
- 3.322129 菩薩地 (537c18)
- 3.3221210 仏地 (537c22)
- 3.3222 名別位通を簡ぶ (538a2)
- 3.32221 三乗共の十地の菩薩に約して別して忍の名を立つ (538a4)
- 3.32222 別教の名を用うるに、名は別にして義は通ず (538a14)
- 3.323 通教に位を明かすに約して浄無垢称の義を釈す (538b15)

- 3.33 別教に約して淨無垢称の義を明かす (538b26)
- 3.331 経論に別教の菩薩の位を辨ずること同じからざるを明かす (538c5)
- 3.3311 諸経に位数を明かすこと同じからず (538c11)
- 3.3312 断伏の高下同じからず (538c17)
- 3.3313 法門に対すること同じからず (538c19)
- 3.332 略して別教の菩薩の位を明かす (538c25)
- 3.3321 十信位を明かす (538c27)
- 3.3322 十住位を明かす (539a8)
- 3.3323 十行位を明かす (539a13)
- 3.3324 十廻向位を明かす (539a19)
- 3.3325 十地位を明かす (539a28)
- 3.33251 初地 (539b5)
- 3.33252 離垢地 (539b27)
- 3.33253 明地 (539b27)
- 3.33254 炎地 (539b28)
- 3.33255 難勝地 (539b29)
- 3.33256 現前地 (539c1)
- 3.33257 遠行地 (539c2)
- 3.33258 不動地 (539c17)
- 3.33259 善慧地 (539c20)
- 3.332510 法雲地 (539c22)
- 3.3326 等覺地を明かす (539c24)
- 3.3327 妙覺地を明かす (540a11)
- 3.333 別教の位に約して淨無垢称の名を釈す (540a27)

[翻訳]

3.3 四教の位に約して淨無垢称の位を分別す

^{535c} 第三に四教の位に約して、淨無垢称の位を分別すとは、即ち五意と為す。

一に三蔵教に約して淨無垢称の義を明かし、二に通教に約して淨無垢称の義を明かし、三に別教に約して淨無垢称の義を明かし、四に円教に約して淨無垢称の義を明かし、五に五味の譬えに約して以て結成す。

3.31 三蔵教に約して淨無垢称の義を明かす

第一に三蔵教に約して位を明かし淨無垢称の義を積すとは、仏の三蔵教を尋ぬるに、縁に赴くこと多塗あり。其の正要を言うに、四門もて道に入ることを出でず。一に有門、二に空門、三に有無門、四に非有非無門なり。今、正しく毘曇の有門を用て、以て位を判ずるなり。三門に菩薩の義を明かすこと既に度せざれば、豈に繆論す可けんや。今、有門に約して淨無垢称の義を積するに、即ち三意と為す。一に三乗を開くを明かし、二に略して三蔵教に菩薩の位を辨ずることを明かし、三に淨無垢称の名を積す。

3.311 略して三乗を開く

第一に略して三乗を開くを明かすとは、仏は生生不可説、非三の理に於いて、^{536a}四悉檀を用う。苦・集・道に約して三乗の教門を開き、三種の行人の根縁に赴き、同じく滅諦涅槃を得しむるなり。故に『法華経』に云わく、「声聞を求むる者の為めに、応ぜる四諦の法を説き、生老病死を度し、涅槃を究竟す。辟支仏を求むる者の為めに、応ぜる十二因縁の法を説き、菩薩を求むる者の為めに、応ぜる六波羅蜜の法を説き、三菩提を得て一切種智を成ぜしむ¹」と。声聞の小乗の教門の若きは、苦諦を初めと為して四諦を觀じて入道し、真無漏を發し、正使を断じ尽くし、位は羅漢に登り、三明²及び八解脱を具足す。既に慈悲もて物を度すこと無ければ、現身に而も涅槃に入る。故に『大

1 『法華経』に云わく、「声聞を求むる者の為めに……三菩提を得て一切種智を成ぜしむ」『法華経』序品、「為求声聞者説四諦法、度生老病死、究竟涅槃。為求辟支仏者説十二因縁法。為諸菩薩説六波羅蜜、令得阿耨多羅三藐三菩提、成一切種智」（T09, no. 262, p. 3, c22-26）を参照。

2 三明 宿命明、天眼明、漏尽明のこと。

智論』に説かく、「麀は^{くじかりょうい}獵圍に在りて、驚怖跳出して、^{すべ}都て群れを顧みざるが如し」³と。今、此れに約して浄名の位を判ぜざるなり。縁覚の中乗の教門の若きは、集諦を初めと為して十二因縁を觀じ、真無漏を發し、三界の結を斷じ尽くし、習氣を侵除し、三明及び八解脱を具足す。少慈悲有りと雖も、物を度すこと能わず、亦た一世に於いて、即ち涅槃に入る。故に『智度論』に云わく、「鹿は獵圍に在りて、驚跳して自ら出で、群れを^{こべん}顧眄⁴して怖ると雖も、^{じょうだい}停待せざるが如し」⁵と。今亦た此れに就いて浄名の位を判ぜず。菩薩の大乗の若きは、慈悲^{くぜい}弘誓もて衆生を捨てず、物の為めの心大教門にして、道諦を以て初めと為し、六度を修行し、一切衆生を化して、共に三界を出で、仏果を成ずるに至り、利益の功円かにして、^{まさ}方に涅槃に入る。故に『大智論』に云わく、「大香象が獵圍に在りて、^{とうせん}刀箭に^あ遭うと雖も、群れを擁して共に出ざるが如し」⁶と。此れは是れ大士の位懷なり。故に須らく此れに約して浄名の位を判ずべきなり。

3.312 三蔵教の菩薩の位を明かす

第二に三蔵教の菩薩の位を明かすとは、略して七と為す。一に菩提心を發

3 『大智論』に説かく、「麀は獵圍に在りて、驚怖跳出して、都て群れを顧みざるが如し」『大智度論』卷第三十一、「声聞畏惡生死、聞衆生空、及四真諦、無常・苦・空・無我、不戲論諸法。如圍中有鹿、既被毒箭、一向求脫、更無他念」(T25, no. 1509, p. 295, b13-15)を参照。

4 顧眄 周囲を見回すこと。守篤本純『維摩詰經玄疏籤録』(以下、『籤録』と記す)卷第三には、「眄」について「正作眄。音勉。邪視也」とある。右顧左眄と同じ意味である。

5 『智度論』に云わく、「鹿は獵圍に在りて、驚跳して自ら出で、群れを顧眄して怖ると雖も、停待せざるが如し」『大智度論』卷第三十一、「辟支仏雖厭老病死、猶能少觀甚深因縁、亦能少度衆生。譬如犀在圍中、雖被毒箭、猶能顧戀其子」(同前、p. 295, b15-18)を参照。

6 『大智論』に云わく、「大香象が獵圍に在りて、刀箭に遭うと雖も、群れを擁して共に出ざるが如し」『大智度論』卷第三十一、「菩薩雖厭老病死、能觀諸法実相、究尽深入十二因縁、通達法空、入無量法性。譬如白香象王在獵圍中、雖被箭射、顧視獵者、心無所畏、及將營從、安歩而去」(同前、p. 295, b18-21)を参照。

し、二に菩薩道を行じ、三に三十二相の業を種え、四に六度成満ろくどじょうまん、五に一いっ生補処しょうふじょ、六に兜率陀天とそつだてんに生じ、七に八相成道はつさうじょうだうなり。

3.3121 菩提心を発す

一に菩提心を発するを明かすとは、釈迦牟尼菩薩は過去世に於いて陶師と為り、前の釈迦牟尼仏に値い、彼の仏を供養し已りて、即ち菩提心を発し、未来に作仏することを得る時、還た釈迦と名づくることを願う。時に仏は其の願を可とするなり⁸。

問うて曰う。何をか菩提心を発すと名づくるや。

答えて曰う。生滅の四諦よつしつに縁りて、慈悲の四弘誓願を起こすは、即ち是れ菩提心を発するなり。

3.3122 菩薩道を行ず

二に菩薩行を行ずるを明かすとは、即ち是れ三阿僧祇劫に六度を行ずるなり⁹。

7 八相成道 釈尊が衆生救済のために、八種の姿を示したこと。成道も八相の一つであるが、最重要なので、別出する。下天・託胎・降誕・出家・降魔・成道・転法輪・入涅槃のこと。

8 釈迦牟尼菩薩は過去世に於いて陶師と為り……時に仏は其の願を可とするなり『大智度論』卷第三、「釈迦文仏先世作瓦師、名大光明。爾時、有仏名釈迦文、弟子名舍利弗・目乾連・阿難。仏与弟子俱到瓦師舍一宿。爾時、瓦師布施草坐・灯明・石蜜漿、三事供養仏及比丘僧、便發願言、我於当来老病死惱五惡之世作仏、如今仏名釈迦文。我仏弟子名、亦如今仏弟子名。以仏願故、得字阿難」(同前、p. 83, b15-22)を参照。

9 三阿僧祇劫に六度を行ずるなり この段の三阿僧祇劫の説明は、『法華玄義』卷第四下にある位妙のなかの「上草の位」(藏教の菩薩)における説明とほとんど同じである(T33, no. 1716, p. 729, b22-c15を参照)。また、『法華玄義』の記述は、『大智度論』に基づく。『大智度論』卷第四、「初阿僧祇中、心不自知我当作仏不作仏。二阿僧祇中、心雖能知我必作仏、而口不称我当作仏。三阿僧祇中、心了了自知得作仏、口自發言、無所畏難。我於来世当作仏。釈迦文仏、從過去釈迦文仏到剌那尸棄仏、為初阿僧祇。是中菩薩永離女人身。從剌那尸棄仏至燃灯仏、為二阿僧祇。是中菩薩七枚青蓮華供養燃灯仏、敷鹿皮衣、布髮掩泥、是時燃灯仏便授其記、汝当来世作仏名釈迦牟尼。從燃灯仏至毘婆尸仏、為第三阿僧祇」(T25, no. 1509, p. 87, a7-18)を参照。

過去の釈迦牟尼^{536b}仏従り、闍那尸棄^{けいなしきぶつ}仏¹⁰に至るまでを、一阿僧祇劫と名づく。此れ従り常に女人の身を離る。爾の時、自ら我れ当に作仏すべきか作仏せざるべきかを知らず。今謂わく、是れ五停心、別相・総相の四念処觀なり。此の觀心を用て、波羅蜜を修するなり。爾の時、未だ^{なん}煖の解を發せざれども、慈悲の誓願有り。生死を^{あんぶ}安撫して、心に^{こにやく}怯弱無し。故に能く女人の業を壊し、常に男子の身を受くるなり。爾の時、未だ煖の解を發せず、位は外凡に在り。故に自ら己身は当に作仏すべしと知らざるなり。次に闍那尸棄^{ねんとう}仏従り、然灯^{ねんとう}仏¹¹に至るまでを、二阿僧祇劫と為す。是の時、菩薩は七莖の蓮華を用て然灯^し仏に供養し、鹿の皮の衣を敷き、髪を^{おほ}布いて泥を掩う。時に然灯^{ねんとう}仏は便ち其れに記を授く、「汝は来世に於いて、当に作仏することを得て、釈迦牟尼と名づくべし」と。爾の時、菩薩は自ら我れ必ず作仏すと知ると雖も、口に我れ当に作仏すべしと^{とな}称えず。今謂わく、煖法の智慧を得て、六波羅蜜を修するなり。次に然灯^{びぼし}仏従り、毘婆尸^{びぼし}仏¹²に至るまでを、第三阿僧祇劫^{くちずか}満ずと為すと明かす。是の時、菩薩は内心に了了に自ら作仏すと知り、口自ら^{いなん}發言するに、畏難する所無し。「我れは来世に於いて当に作仏することを得べし」と。今謂わく、此れは是れ頂法の智慧もて六波羅蜜を行ずるなり。

3.3123 三十二相の業を種う

三に三阿僧祇劫を過ぎて、三十二相の業を種うるを明かすとは、今謂わく、此れは是れ下忍¹³の位に入る。此の忍智を用て六度を修行し、百福の徳を成ず。百福の徳を用て一相を成ず。是の如く百劫に三十二相の業因を成ずるなり。

3.3124 六度成満

10 闍那尸棄仏 Ratnaśikhin の音写語。宝髻、宝頂などと訳す。

11 然灯^{ねんとう}仏 「然」は「燃」に通じる。Dipamkara の訳語。錠光とも訳す。

12 毘婆尸^{びぼし}仏 Vipasyin の音写語。

13 下忍 煖・頂・忍・世第一法の第三の忍を上中下の三忍に分けた（下忍・中忍・上忍）なかの最初の位。

四に六波羅蜜満ずるを明かすとは、菩薩は一切能く施し、乃至、身命を惜し
 まず。尸毘王は、身を以て鶻に施し、心に悔恨せざるが如し¹⁴。是れ檀満と
 為す。尸波羅蜜満ずとは、持戒して身命を惜しまず。須摩提王、精進持戒して、
 常に実語に依り、鹿足王に赴いて就いて死ぬが如し。是れ尸羅満ずと為す¹⁵。
 羼提波羅蜜満ずとは、菩薩は忍辱して、身命を惜しまず。羼提比丘、歌利王
 のために割截し、心に慈忍を生じ、誓いを発して身復するが如きを、羼提満
 ずと名づく¹⁶。毘梨耶波羅蜜満ずとは、精進して身命を惜しまず。大施太子は
 国民ののために、海に入りて宝を採り、如意珠を得るが如し。海神は其れ寢臥
 するに因りて、珠を盗み海に還り、太子は誓いを発して海水を抒み、衆生の
 ために珠を求め、困苦し垂命¹⁷するに、心に懈怠無きを、精進満ずと名づ
 く¹⁸。禪波羅蜜満ずとは、菩薩は禪定を具足し、外道の禪定に於いて、出入自
 在なり。尚闍梨仙人は坐禪の時、出入息無きが如し。鳥は髻上に於いて子を

14 尸毘王は、身を以て鶻に施し、心に悔恨せざるが如し 『菩薩本行經』卷第三、「仏言、我為尸毘王時、為一鶻故、割其身肉、興立誓願、除去一切衆生危險」(T03, no. 155, p. 119, a26-28)を参照。「尸毘」は、Śivi の音写語。

15 尸波羅蜜満ずとは、持戒して身命を惜しまず。須摩提王、精進持戒して、常に実語に依り、鹿足王に赴いて就いて死ぬが如し。是れ尸羅満ずと為す 『大智度論』卷第四、「爾時、須陀須摩王讚実語、実語是為人、非実語非人。如是種種讚実語、呵妄語。鹿足聞之、信心清淨、語須陀須摩王言、汝好説此、今相放捨。汝既得脱、九十九王亦布施汝、随意各還本国。如是語已、百王各得還去。如是等種種本生中相、是為尸羅波羅蜜満」(同前、p. 89, b5-11)を参照。須陀須摩と鹿足王(斑足王)の物語をいう。「須摩提」、「須陀須摩」は、Śrutāsoma の音写語。

16 羼提波羅蜜満ずとは、菩薩は忍辱して、身命を惜しまず。羼提比丘、歌利王ののために割截し、心に慈忍を生じ、誓いを発して身復するが如きを、羼提満ずと名づく 『大智度論』卷第四、「問曰、羼提波羅蜜云何満。答曰、若人來罵、搗捶割剝、支解奪命、心不起瞋。如羼提比丘為迦梨王截其手足耳鼻、心堅不動」(同前、p. 89, b11-14)を参照。「羼提」は、virya の音写語。「歌利」は、kalinga、または kali の音写語。

17 垂命 生命が危機に瀕すること。

18 毘梨耶波羅蜜満ずとは、精進して身命を惜しまず……心に懈怠無きを、精進満ずと名づく 『大智度論』卷第四、「問曰、毘梨耶波羅蜜云何満。答曰、若有大心、勤力如大施菩薩、為一切故、以此一身、誓抒大海、令其乾尽、定心不懈。亦如讚弗沙仏、七日七夜翹一腳、目不眴」(同前、p. 89, b14-17)を参照。

生み、慈悲もて動かさず。乃至、鳥子飛び出ず。是れ禪満と名づく¹⁹。般若波羅蜜満ずとは、菩薩は大心もて分別す。劬嬪^{くひん}婆羅門大臣、閻浮^{えんぶ}大地を分けて七分と為すが如し。若干の大城・小城・聚落分ちて七分と作る。般若波羅蜜も亦た是の如し²⁰。此れを菩薩の六波羅蜜満ずと為す。今謂わく、是の下忍の智慧に由りて、能く諸根を調伏し、六度を満足するなり。

3.3125 一生補処

五に一生補処に住すとは、即ち是れ釈迦菩薩、迦葉仏の所に生じ、補処の弟子と作る。淨く禁戒^{こんかい}を持ち、諸の功德を行じ、迦葉仏授記す、「次に当に作仏すべし」と。今謂わく、此れは猶お是れ中忍の位なり。

3.3126 兜率陀天に生ず

六に兜率陀天に生ずるを明かすとは、閻浮提の報を捨てて、上、此の天に生じ、諸天の師と為る。彼の天に在りて、八勝^{はちしょうしよ}処を修す。今謂わく、此れは猶お是れ中忍の位なり。

問うて曰う。菩薩は何の意ぞ初^{ぶく}発心に結を伏すれども、断ぜざるや。

答えて曰う。若し結を断ぜば、即ち生を受けて物を化することを得ず。菩薩は無常を観じて結を伏して、諸の煩惱の脂^{しよ}をして消せしめ、清浄心を用て六度を修行し、諸の功德をして肥えしむるなり。

3.3127 八相成道

19 禅波羅蜜満ずとは、菩薩は禅定を具足し……乃至、鳥子飛び出ず。是れを禅満と名づく『大智度論』卷第四、「問曰、禅波羅蜜云何満。答曰、如一切外道禅定中得自在。又如尚闍梨仙人、坐禅時無出入息、鳥於螺髻中生子、不動不搖、乃至鳥子飛去」(同前、p. 89, b17-21)を参照。

20 般若波羅蜜満ずとは、菩薩は大心もて分別す……七分と作る。般若波羅蜜も亦た是の如し『大智度論』卷第四、「問曰、般若波羅蜜云何満。答曰、菩薩大心思惟分別、如劬嬪^{くひん}婆羅門大臣、分閻浮提大地作七分。若干大城、小城、聚落村民、尽作七分。般若波羅蜜如是」(同前、p. 89, b21-24)を参照。「劬嬪陀」は、Kapphinaの音写語。

七に下生成道げしやうを明かすとは、即ち是れ三蔵教に八相もて菩提道を成ずるを明かすなり。言う所の八相成道とは、一に兜率陀天従り下り、二に託胎し、三に出生し、四に出家し、五に魔を降し、六に成道し、七に法輪を転じ、八に涅槃に入るなり。

問うて曰う。明かす所の三蔵教の阿毘曇あびどんの有門に菩薩の義を説く。是れ仏説くと為すや、是れ仏、世を去りて後、諸の声聞弟子説くと為すや。

答えて曰う。亦た是れ仏説くこと有り。多く是れ諸の羅漢、毘婆沙²¹の説を作すこと有るなり。

問うて曰う。若是し仏説かば、此れは則ち信ず可し。若し諸の羅漢の説く所ならば、云何んが信ず可きや。

答えて曰う。諸の羅漢は既には是れ聖人なれば、仏の三蔵教の意とを採りて、菩薩の義を明かす。何ぞ頓とみに乖僻かいびやくす容けんや。

問うて曰う。若し爾らば、『智度論』は何の意ぞ始め従り終わりに至るまで、一一に弾破するや。

答えて曰う。龍樹は摩訶衍を申べんと欲せんが為めに、菩薩の義を明かし、大を以て小を破す。皆な破す可きなり。

問うて曰う。龍樹は訶して云わく、「是の迦旃延の弟子は、小乗経に於いて失有り。何に況んや菩薩の義を解すをや」²³と。

答えて曰う。舍利弗537aは、仏在世の時に、法相を分別するに、猶尚なお失有り。何に況んや仏、世を去りて後の諸の羅漢をや。然りと雖も、影傍ようぼう²⁴するに、

21 毘婆沙 vibhāṣā の音写語。広解、広説、勝説などと訳す。注解書を指す。

22 乖僻 背き避けること。

23 龍樹は訶して云わく、「是の迦旃延の弟子は、小乗経に於いて失有り。何に況んや菩薩の義を解すをや」『大智度論』巻第四、「声聞法中、摩訶迦旃延尼子弟子輩、説菩薩相義如是。摩訶衍人言、是迦旃延尼子弟子輩、是生死人、不誦不説摩訶衍経、非大菩薩。不知諸法実相、自以利根智慧、於仏法中作論議、諸結使・智・定・根等於中作義。尚処処有失。何況欲作菩薩論議。譬如少力人跳小渠、尚不能過。何況大河。於大河中則知没失」(同前、p. 91, c6-13)を参照。

24 影傍 影のように依ること。

猶お今時の凡夫に^{たが}差うなり。

3.313 三蔵教の位に約して浄無垢称の義を釈す

第三に三蔵教の位に約して、浄無垢称の義を釈すとは、正しく中忍補処の位に在るなり。六度の道は、即ち是れ浄の義なり。所以は何ん。三種の薬の中に、三種の病無し。六度は是れ道諦、是れ浄の義なり。故に『法華経』に云わく、「又た仏子、種種の行を修し、無上慧を求め、為めに浄道を説くを見るなり」²⁵と。維摩大士の六度の行成ずるは、即ち是れ浄の義にして、六蔽²⁶の垢無し。故に「無垢」と言う。相似²⁷の解を以て、内に生滅四諦の理に^{かな}称い、外に根縁に称い、釈迦如来、三乗の教を顕わすを助く。故に「浄無垢称」と云うなり。是を以て方便品に、疾を現じて、国王長者の為めに、無常・苦・空・無我・不浄の法を説き、諸人を訶責し、仏果を求むるを勧む²⁸。意は此に在るなり。

問うて曰う。維摩は声聞を折²⁹挫し菩薩を^{だんか}弾訶す。此れは是れ不思議の位行なり。何ぞ声聞経に明かす所の菩薩の位を用て^{じげん}较量するや。

答えて曰う。不思議解脱に住する菩薩は、能く^{じげん}種種に示現す。豈に声聞経

25 『法華経』に云わく、「又た仏子、種種の行を修し、無上慧を求め、為めに浄道を説くを見るなり」『法華経』序品、「若有仏子 修種種行 求無上慧 為説浄道」(T09, no. 262, p. 3, a3-4)を参照。

26 六蔽 六波羅蜜を妨げる六種の悪心のことで、慳心・破戒心・瞋恚心・懈怠心・乱心・癡心をいう。『大品般若経』序品、「菩薩摩訶薩欲不起慳心破戒心瞋恚心懈怠心乱心癡心者、当学般若波羅蜜」(T08, no. 223, p. 220, b10-11)に対する『大智度論』卷第三十三の注、「是六種心惡、故能障蔽六波羅蜜門。……菩薩行般若波羅蜜力、故能障是六蔽、淨六波羅蜜。以是故説、若欲不起六蔽、当学般若波羅蜜」(T25, no. 1509, p. 303, c26-p. 304, b6)を参照。

27 相似 相似即のこと。

28 方便品に、疾を現じて、国王長者の為めに、無常・苦・空・無我・不浄の法を説き、諸人を訶責し、仏果を求むるを勧む 『維摩経』卷上、方便品、「其以方便、現身有疾。以其疾故、国王大臣、長者居士、婆羅門等、及諸王子并余官属、無数千人、皆往問疾」(T14, no. 475, p. 539, b10-12)を参照。

29 折 底本の「析」を『再校維摩経玄義』の頭注に記される宋本によって改める。

に明かす所の菩薩の像を現じて釈迦を輔^{たす}けて弘^く化^けすること能わざるや。

問うて曰う。何が故に国王・長者を化して、三蔵の菩薩の形を示して説法し、声聞・菩薩を訶して、即ち摩訶衍の不思議の言教を現ずるや。

答えて曰う。凡俗の界内の結業は未だ除かざるが故に、生滅の四諦を説く。此れは正しく是れ対治なり。羅漢・菩薩の界内の因疾は已に除く。但だ不思議の三諦の理に迷うのみ。是の故に三種の四諦を説いて以て声聞^{しやく}を折し、無作の四実諦を説いて菩薩を訶するなり。

3.32 通教に約して淨無垢称の義を明かす

第二に通教に約して位を辨じ、淨無垢称の位を釈すとは、此の教は既に因縁即空の理を詮ずれば、三乗は同じく稟^うけ、理に契^{かな}い真を証するに、必ず淺深有り。故に須らく位を判すべきなり。通教の入道も亦た四門を具す。今、空門に約して以て位を辨ずるなり。亦た三意と為す。一に略して通教に約して三乗を開くを明かし、二に略して通教の菩薩の位を明かし、三に淨無垢称の義を釈す。

3.321 通教に約して三乗を開く

第一に略して通教に約して三乗を開くを明かすとは、三乗の人は同じく通教を稟^うけ、第一義を見る。第一義とは、即ち是れ無分別の真諦の理なり。而るに分別して三乗を説くとは、声聞は聞^{537b}従り解を生ず。総相もて仮を体し空に入り、智慧力弱くして、但だ正使を断ずるのみ。縁覚は福德利根にして、無仏の世に生じ、自然に仮を体し真を発するを異と為す。又た解す。縁覚は利根にして、能く少しく³⁰ 別相もて仮を体し空に入り、真無漏を発し、三界の結を断じ、習気を侵除するなり。三に菩薩乗とは、菩薩は総相・別相の智慧を修し、因縁即空を体し、大悲の誓願を起こし、諸法門を修す。若し第一義を見て界内の煩惱を断ぜば、誓願^{たす}を用て習^まを扶け、還た三界に生じ、神通

30 能く少しく 底本の「能少」は、『四教義』卷第八には、「能少分別」(大正四六、七四七下一八)とある。

に遊戯し、衆生を成就し、仏国土を淨むるなり³¹。故に『中論』に云わく、「諸仏は甘露味を以て、衆生を教化す。諸法実相は是れ眞の甘露味なり。若し諸法実相を得て、諸煩惱を滅せば、声聞乗と名づく。若し大悲を生じ、無上意を發せば、名づけて大乘と爲す。若し仏滅後の時、世に仏無く、遠離に因りて智を生ぜば、辟支仏乗と名づく」³²と。

3.322 通教の三乗の位を明かす

第二に通教の三乗の位を明かすとは、即ち二意と爲す。一に三乗共の十地を明かし、二に名別位通えらを簡ぶ。

3.3221 三乗共の十地を明かす

一に三乗共行の十地の位を明かすとは、即ち二意と爲す。一に名を標し、二に略して解釈す。

3.32211 名を標す

一に名を標すとは、一に乾慧地けんねじ、二に性地、三に八人地、四に見地、五に薄地、六に離欲地、七に已辦地いべんじ、八に辟支仏地、九に菩薩地、十に仏地なり。故に『大品』に云わく、「菩薩は初乾慧地従り菩薩地に至るまで、皆な行じ

31 神通に遊戯し、衆生を成就し、仏国土を淨むるなり 『法華経』方便品、「世尊往昔說法既久、我時在座、身体疲懈、但念空・無相・無作、於菩薩法、遊戯神通、淨仏国土、成就衆生、心不喜樂」(大正九、一六中一五一一七)を参照。

32 『中論』に云わく、「諸仏は甘露味を以て……遠離に因りて智を生ぜば、辟支仏乗と名づく」『中論』卷第三、觀法品、「若行道者能通達如是義、則於一切法、不一不異、不斷不常。若能如是、即得滅諸煩惱戲論、得常樂涅槃。是故說諸仏以甘露味教化。如世間言得天甘露漿、則無老病死、無諸衰惱。此実相法是真甘露味。仏說実相有三種。若得諸法実相、滅諸煩惱、名為声聞法。若生大悲發無上心、名為大乘。若仏不出世、無有仏法時、辟支仏因遠離生智。若仏度衆生已、入無余涅槃、遺法滅尽。先世若有應得道者、少觀厭離因縁、獨入山林遠離憒鬧得道、名辟支仏」(T30, no. 1564, p. 25, b18-29)を参照。

皆な学べども、証を取らず。仏地は亦た学び亦た証す」³³と。故に三乗の通の位と言うなり。

3.32212 略して解釈す

二に略して解釈すとは、

3.322121 乾慧地

乾慧地は即ち是れ三乗の初心を、通じて乾慧地と名づくるなり。此れは是れ三賢の位なり。一に五停心、二に別相念処、三に総相念処なり。此の三は通じて外凡の乾慧地と名づくるなり。

問うて曰う。若し爾らば、三藏教に三賢を明かすと、何の異なり有るや。答えて曰う。一往、名は同じけれども、拙・巧せつ ぎょうの両度あり。已に前の三観分別の如し。豈に異ならざることを得んや。

問うて曰う。三乗の人は同じく第一義諦を觀ず。亦た応に同じく八倒を破し、同じく仏性を見るべし。何ぞ通教もて二涅槃に入ると言うことを得んや。

答えて曰う。八倒を破すは、是れ一往の言なり。分別するに、四種の不同有り。一に八倒を破し、枯榮³⁴を結せず。是れ則ち通・別・円、未だ定判す可からざるなり。二に八倒を破し、四枯を結成す。多く通教に属す。三に八倒を破し、四榮を結するは、定んで別教を成す。四に八倒を破し、双べて枯榮^{537c}を結するは、即ち是れ円教なり。

33 『大品』に云わく、「菩薩は初乾慧地従り菩薩地に至るまで、皆な行じ皆な学べども、証を取らず。仏地は亦た学び亦た証す」『大智度論』卷第十九、「菩薩摩訶薩応学一切善法、一切道。如仏告須菩提、菩薩摩訶薩行般若波羅蜜、悉学一切善法、一切道。所謂乾慧地乃至仏地。是九地応学而不取証、仏地亦学亦証」(T25, no. 1509, p. 197, b23-27)を参照。

34 枯榮 四枯四榮は、釈尊が涅槃に入るとき、東西南北の四方に娑羅の双樹があり、それぞれの方角の双樹のうち、一本が枯れ、一本が榮えたので、四枯四榮という。ここでは、二乗が凡夫の四倒を破して、世間の法について苦・空・無常・無我を正しく観じることを四枯といい、菩薩が二乗の四倒を破して、涅槃の法について常・樂・我・淨を正しく観じることを四榮という。

今、八倒を破するを明かす。浄名の迦旃延を訶するを用て、三蔵の五義³⁵を破し、摩訶衍の五義を説く。即ち四枯を結成す。故に彼の諸の比丘は、心に解脱を得。一往は通教の意に属するなり。

3.322122 性地

二に性地を明かすとは、若し総相念処に因りて、初めに善有漏の五陰を發せば、名づけて煖法と為す。初・中・後心に増進して、頂法・忍法・世第一法に入るを、皆な名づけて性地の内凡と為す。俱に界内の見惑を伏するなり。

3.322123 八人地

三に八人地を明かすとは、即ち是れ三乗の信・法の二種の行人、巧みに觀じ真を發するは、無間三昧むげんざんまいに在り。十五心は、八忍の位なり³⁶。

3.322124 見地

四に見地を明かすとは、即ち是れ三乗は同じく第一義、無生四諦の理を見、同じく見惑の三結³⁷、及び八十八使を断じ尽くすなり。

3.322125 薄地

五に薄地とは、愛仮³⁸は即ち真なりと体し、六品の無閼むげを發し、欲界の六品を断じ、第六の解脱を証す。欲界の煩惱は薄きなり。

35 五義 無常義、苦義、空義、無我義、寂滅義の五義である。『維摩經』卷上、弟子品、「迦旃延白仏言、世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念昔者、仏為諸比丘略説法要、我即於後、敷演其義。謂無常義、苦義、空義、無我義、寂滅義」(T14, no. 475, p. 541, a12-16)を参照。

36 十五心は、八忍の位なり 苦法忍、苦法智、苦類忍、苦類智、集法忍、集法智、集類忍、集類智、滅法忍、滅法智、滅類忍、滅類智、道法忍、道法智、道類忍、道類智を八忍・八智の十六心という。「十五心」は、第十六の道類智を除いた前の十五項を指す。このなかには、八忍があることになる。

37 三結 見結・戒取結・疑結のこと。

38 愛仮 思惑のこと。

3.322126 離欲地

六に離欲地とは、即ち是れ三乗の人、愛仮は即ち真なりと体し、欲界の五下分結を断じ尽くす。欲界の煩惱を離るるなり。

3.322127 已辦地

七に已辦³⁹地は、即ち是れ三乗の人、色・無色の愛は即ち真なりと体し、真無漏を発し、五上分結、七十二品を断じ尽くすなり。三界の惑を断ずること究竟^{くきょう}するが故に、已辦⁴⁰地と言うなり。

3.322128 辟支仏地

八に辟支仏地とは、縁覚・菩薩は真無漏を発し、功德力大なるが故に、能く習を侵除するなり。

3.322129 菩薩地

九に菩薩地とは、空従り仮に入る観行は純熟して、道観双流^{どうかんそうる}⁴¹し、深く二諦を觀じ、進んで習気、及び色心無知を断じ、法眼・道種智を得、神通に遊戲し、仏国土を淨め、仏の十力・四無所畏・大慈悲等の一切の仏法を学び、習気を断ずること將に尽きんとするなり。

3.3221210 仏地

十に仏地とは、大功德力は智慧^{たす}を資け、一念相應の慧を得、真俗^{しやうぐう}を照窮するに、一切の界内の習気は究竟して尽くるなり。故に『智度論』に云わく、「声聞の智慧力は弱きこと、小火の木を焼くが如し。然^もゆると雖も、猶お炭の在ること有り。縁覚の智慧力は勝^{すぐ}るること、大火の木を焼くが如し。木は然え

39 辦 底本の「辨」を文意によって改める。

40 辦 底本の「辨」を文意によって改める。

41 道観双流 他を教化する道=化道と、空の理を觀察する空観とを並び行なうこと。

炭は尽き、余りて灰の在ること有り。諸仏の智慧力の大なるは、劫焼火の如し。炭・灰は俱に尽く⁴²と。亦た兎・馬・象の三獸渡河の論え⁴³の如きなり。

問うて曰う。菩薩・仏地の名は二乗に異なり。何ぞ通とすることを得んや。答えて曰う。名は異なり有りと雖も、同じく是れ無学・応供⁴⁴にして、二涅槃^{538a}を得、共に灰断に帰す。証果は是れ一にして、名と義は殊ならず。是れ則ち名と義は、究竟して俱に同じきなり。

3.3222 名別位通を簡ぶ

二に名別位通を明かすとは、即ち二意と為す。一に前の三乗共十地に約して菩薩は別して忍の名を立つ。二に別教の名を用うるに、名は別にして義は通なり。

3.32221 三乗共の十地の菩薩に約して別して忍の名を立つ

一に三乗共行の十地の菩薩に約して⁴⁶、別して忍の名を立つとは、『大智論』に云わく、「乾慧地は菩薩の法に於いて名づけて伏忍と為し、性地は菩薩の法に於いて名づけて順忍と為し、八人地は菩薩の法に於いて名づけて無生法忍⁴⁷と為し、見地は菩薩の法に於いて無生法忍果と名づけ、薄地は菩薩の法

42 『智度論』に云わく、「声聞の智慧力は弱きこと……炭・灰は俱に尽く」『大智度論』卷第二十七、「如是等諸聖人、雖漏尽、而有煩惱習。如火焚薪已、灰炭猶在。火力薄故、不能令尽。若劫尽時火、燒三千大千世界無復遺余。火力大故。仏一切智火亦如是。燒諸煩惱、無復殘習」(T25, no. 1509, p. 260, c23-27) を参照。

43 兎・馬・象の三獸渡河の論え 『優婆塞戒經』卷第一、三種菩提品、「善男子。如恒河水、三獸俱渡、兔、馬、香象。兔不至底、浮水而過。馬或至底、或不至底。象則尽底。恒河水者、即是十二因縁河也。声聞渡時、猶如彼兔。縁覺渡時、猶如彼馬。如来渡時、猶如香象。是故如来得名為仏。声聞、縁覺雖斷煩惱、不斷習氣、如来能拔一切煩惱、習氣根原、故名為仏」(T24, no. 1488, p. 1038, b8-14) を参照。

44 無学・応供 いずれも阿羅漢を指す。

45 二涅槃 有余涅槃と無余涅槃のこと。

46 三乗共行の十地の菩薩に約して 底本の「約三乗共行十地为菩薩」の「為」を文意により削る。

47 忍 底本の「名」を、文意と『籤録』によって改める。

に於いて離欲清浄と名づけ、離欲地は菩薩の法に於いて神通に遊戯すと名づけ、已辦⁴⁸地は声聞經に於いて説いて名づけて仏地と為す⁴⁹と。辟支仏地、乃至、仏地は、前に分別するが如し。

問うて曰う。何の意ぞ菩薩の法の中に於いて、別して伏忍等の別名を立つるや。

答えて曰う。理を觀ずること同じと雖も、方便修行して、他を化し仏を求むるに、果に異なり有るが故に、菩薩の法に於いて、別して伏忍等の別名を立つるなり。其の相を分別すること、具さには『四教大本』に在り⁵⁰。

3.32222 別教の名を用うるに、名は別にして義は通ず

二に別教の名を用うることを明かす。名は別なれども義は通ずとは、即ち是れ三乗は同じく第一義諦の理を觀ず。菩薩は別教の十信・三十心・十地の名を用て位を辨ずるなり。乾慧地は伏忍にして、十信の別名を立つ⁵¹。性地は柔順忍にして、十住・十行・十迴向の名を立つ。八人地・見地は、即ち是れ

48 辦 底本の「辨」を文意によって改める。

49 『大智論』に云わく、「乾慧地は菩薩の法に於いて名づけて伏忍と為し……已辦地は声聞經に於いて説いて名づけて仏地と為す」『大智度論』卷第七十五、「十地者、乾慧地等。乾慧地有二種。一者声聞、二者菩薩。声聞人獨爲涅槃故、勤精進、持戒心清浄、堪任受道。或習觀仏三昧、或不浄觀、或行慈悲、無常等觀、分別集諸善法、捨不善法。雖有智慧、不得禪定水、則不能得道、故名乾慧地。於菩薩、則初發心乃至未得順忍。性地者、声聞人、從煖法乃至世間第一法。於菩薩得順忍、愛著諸法実相、亦不生邪見、得禪定水。八人地者、從苦法忍乃至道比智忍、是十五心。於菩薩則是無生法忍、入菩薩位。見地者、初得聖果。所謂須陀洹果。於菩薩則是阿鞞跋致地。薄地者、或須陀洹、或斯陀含、欲界九種煩惱分斷故。於菩薩、過阿鞞跋致地、乃至未成仏。斷諸煩惱、余氣亦薄。離欲地者、離欲界等貪欲諸煩惱、是名阿那含。於菩薩、離欲因縁故、得五神通。已作地者、声聞人得尽智、無生智、得阿羅漢。於菩薩、成就仏地」(T25, no. 1509, p. 585, c28-p. 586, a17)を参照。

50 具さには『四教大本』に在り『四教義』卷第八(T46, no. 1929, p. 750, b24-p. 751, b1)を参照。

51 十信の別名を立つ 底本の「立名十信別名」を『籤録』によって、「立十信別名」に改める。

無生忍を得、歡喜地の名を立つ。故に『大品經』に云わく、「須陀洹の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」⁵²と。薄地向・果あり。向は即ち離垢地、果は即ち明地なり。故に『大品經』に云わく、「斯陀含の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」⁵³と。阿那含地向・果あり。向は即ち是れ炎地、果は即ち是れ難勝地なり。故に『大品經』に云わく、「阿那含の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」⁵⁴と。羅漢地向・果あり。向は是れ現前地、果は是れ遠行地なり。故に『大品經』に云わく、「阿羅漢の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」⁵⁵と。辟支仏地は、即ち是れ第八不動地にして、習気を侵除するなり。故に『大品經』に云わく、「辟支仏の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」⁵⁶と。菩薩地は即ち是れ九の善慧地、十の法雲地なり。當に仏の如しと知るべし⁵⁷。仏地は前に説くが如し。道場に坐する時、一念相應の慧もて一切の習気を斷じ尽くすとは、謂う所は煩惱障・法障^{53b}の習気なり。一切有縁の衆生を化し、竟に無余涅槃に入る。薪尽きて火滅するが如し。八相成道は、前に説くが如し。是れ則ち別教の名を用て位を辨ず。名は異なれども、義は同じ。猶お通教に屬して、菩薩の位を明かすなり。

問うて曰う。初地従り七地に至るまで四果に対するは、何れの經論に出ずるや。

52 『大品經』に云わく、「須陀洹の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」『大品般若經』卷第二十二、遍學品、「是八人若智若斷、是菩薩無生法忍。須陀洹若智若斷、斯陀含若智若斷、阿那含若智若斷、阿羅漢若智若斷、辟支佛若智若斷、皆是菩薩無生忍」(T08, no. 223, p. 381, b23-26)を参照。

53 『大品經』に云わく、「斯陀含の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」前注 52 を参照。

54 『大品經』に云わく、「阿那含の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」前注 52 を参照。

55 『大品經』に云わく、「阿羅漢の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」前注 52 を参照。

56 『大品經』に云わく、「辟支佛の智・斷は、是れ菩薩の無生法忍なり」前注 52 を参照。

57 菩薩地は即ち是れ九の善慧地、十の法雲地なり。當に仏の如しと知るべし『大品般若經』卷第六、發趣品、「十地菩薩當知如佛」(T08, no. 223, p. 257, c7)を参照。

答えて曰う。諸經論は、対当せざるに非ず。但だ高下は同じからず。古今の法師は対当すれども、亦た殊異多し。然る所以は、或いは云わく、「見地はただ初地⁵⁸に対するのみ」と。此れは今用うる所の如し。或いは三地⁵⁹を取りて、併せて見地^{あわ}に対す。『仁王經』に四地を明かすに、併せて見地^{あわ}に対す⁶⁰。此れは則ち定んで依る可きこと難し。但だ通教の見地は本と是れ無間の道にして、観を出でずして、須陀洹を証す。豈に初地従り見を断じ、乃至三地に、或いは四地と云うことを得んや。若し別教に別惑を断ずることを明かさば、二乗に共⁶¹せず。此の如く義を明かすに、或いは当に之れ有るべし。又た或いは言わく、六地の断結は羅漢^{ひと}と齊し。或いは云わく、七地を阿羅漢と名づく。此れは定めて執ること難し。前後の両果、經論に義を明かすこと既に定まらざれば、其の間の二果は、意を以て知る可し。既に定んで依る可からざれば、今、義を用て推し、此の対位⁶²を作すことは、一往小しく便なりと雖も、終に執る可からざるなり。

3.323 通教に位を明かすに約して淨無垢称の義を釈す

第三に通教に位を明かすに約して淨無垢称の義を釈すとは、大士の位は、補處に在り。真諦の理性は自ら皎然たるを、之れを名づけて淨と為す。界内の二障の正惑は已に尽き、習気は微薄なり。故に無垢と名づく。智慧は内に真諦と相応し、外に能く三乗の根性に称い、神通もて説法す。故に称と云うなり。是れ則ち略して通教の大士、淨無垢称の名を受くるを辨ず。須らく此の菩薩の像を示現すべき所以は、此の形声^{ぎょうしやう}を以て疾に託し、国王長者の為めに、夢幻の如きの法を説いて、菩提を求むるを勧めればなり。又た三蔵教の三乗、拙度に封守するの迷僻を破するなり。若し什師、生、肇の『注維摩經』⁶³

58 初地 歡喜地を指すか。

59 三地 不共の十地の第三地の明地=發光地を指すか。

60 『仁王經』に四地を明かすに、併せて見地に対す 出典未詳。

61 共 底本の「若」を『再校維摩經玄義』の頭注に記される宋本によって改める。

62 対位 位に対応させること。

63 什師、生、肇の『注維摩經』 鳩摩羅什、道生、僧肇の『維摩經』に対する注を

を尋ねば、同じく此の意を用う。梁・陳の諸の大法師は、此の經の文を講じ、菩薩の位を判ず。意を厝くに高下あり。小しく同じからずと雖も、今家往望するに、皆な併せて是れ通教の意を用て、此の經を釈するのみ。

3.33 別教に約して淨無垢称の義を明かす

第三に別教に位を明かすに約して無垢称の義を釈すとは、此の教は通じて仮名、如⁶⁴ 來藏、仏性の理を詮ず。菩薩は此の教門を稟けて修行得証す。浅き従り深きに至るが故に、須らく位を明かすべし。此の別教の入道に、亦た四門有り。今、但だ空有門に約して行位を明かすなり。『大涅槃經』に云うが如し、「第一義空を、名づけて仏性と為す。智者は空、及^{538c} 与^{およ}び不空を見る。声聞・辟支仏は、但だ空を見るのみにして、不空を見ず。不空とは、即ち仏性なり」⁶⁵と。

此れに就いて即ち三意と為す。一に經論に別教を辨ずること同じからざるを明かす。二に略して別教の位を明かす。三に別教に約して、淨無垢称の義を釈す。

3.331 經論に別教の菩薩の位を辨ずること同じからざるを明かす

編集した『注維摩詰諸説經』を指す。

64 如 底本の「如如」を『籤録』の「文中剩写一个如字」によって改める。また、『四教義』卷第九、「別教詮因縁仮名・如来藏・仏性之理」(T46, no. 1929, p. 751, c23-24)を参照。

65 『大涅槃經』に云うが如し、「第一義空を、名づけて仏性と為す。智者は空、及^{538c} 与^{およ}び不空を見る。声聞・辟支仏は、但だ空を見るのみにして、不空を見ず。不空とは、即ち仏性なり」『南本涅槃經』卷第二十五、師子吼菩薩品、「仏性者、名第一義空。第一義空名為智慧。所言空者、不見空与不空。智者見空及与不空、常与無常、苦之与樂、我与無我。空者一切生死、不空者謂大涅槃。乃至無我者即是生死、我者謂大涅槃。見一切空、不見不空、不名中道。乃至見一切無我、不見我者、不名中道。中道者、名為仏性。以是義故、仏性常、恒、無有變易、無明覆故、令諸衆生不能得見。声聞、縁覚見一切空、不見不空、乃至見一切無我、不見於我。以是義故、不得第一義空。不得第一義空故、不行中道。無中道故、不見仏性」(T12, no. 375, p. 767, c18-p. 768, a1)を参照。

第一に經論に別教の菩薩の位を辨ずること同じからずとは、別教を尋ぬるに、正しく因縁仮名、恒沙の仏法、真如・仏性の理を明かす。菩薩は此の教を稟けて、三諦の理を觀ず。歷劫修行して、恒沙の無知⁶⁶、別の見思惑⁶⁷を断じて、仏性を見、常住四德⁶⁸の涅槃を求めんと欲す。

今、別位の不同を明かすに、略して三意と為す。一には諸經に位の数を明かすこと同じからず。二に断伏の高下同じからず。三に法門に対すること同じからず。

3.3311 諸經に位数を明かすこと同じからず

一に諸經に位の数を明かすこと同じからずとは、『華嚴經』は三十心⁶⁹・十地・仏地にして、但だ四十一位有るのみ、『瓔珞經』に五十二位有るを明かし、『仁王經』に五十一位を明かし、新翻の『金光明』、『勝天王般若』、及び『大品經』に但だ十地・仏地を明かすのみにして、三十心を開かず、『大涅槃經』に五行⁷⁰・十功德⁷¹を明かすが如し。義推するに、三十心・十地を開くに似⁷²たり。諸論に地位を明かすこと、多少⁷³同じからず。悉ごとく是れ經に約するが故に爾り。

3.3312 断伏の高下同じからず

二に断伏の高下同じからざるを明かすとは、三⁷⁴十心に界内の結を断ずる

66 恒沙の無知 別教の塵沙惑を指す。

67 別の見思惑 別教の見思惑を指す

68 常住四德 常樂我淨の四德を指す。

69 三十心 十住・十行・十廻向を指す。

70 五行 『南本涅槃經』卷第十一、聖行品 (T12, no. 375, p. 673, b24-25) に説かれる聖行・梵行・天行・嬰兒行・病行の五行を指す。

71 十功德 『南本涅槃經』卷第十九から卷第二十四までに説かれる (T12, no. 375, p. 730, a8-p. 766, c1)。後注 84 を参照。

72 似 底本の「以」を『再校維摩經玄義』の頭注に記される宋本によって改める。

73 少 底本の「小」を『再校維摩經玄義』の頭注に記される宋本によって改める。

74 三 底本の「二」を『再校維摩經玄義』の頭注に記される宋本によって改める。

こと、高下同じからず。十地に界外の見思を断ず。位に対するに異なり有るなり。具さには『四教大本』に在り⁷⁵。

3.3313 法門に対すること同じからず

三に法門に異なり有りと明かすとは、『華嚴經』は十波羅蜜をば十行に対し、新翻の『金光明經』は十波羅蜜を用て十地に対す。此の如き等の諸經は、位に約して諸法門に対すること、多く同じからざるなり

問うて曰う。何の意ぞ別教に位を明かし、經論に数を辨ずるに、法門に対すること同じからざるや。

答えて曰う。別教は界外に約して十地の位行断伏を辨じ、諸法門に対し、悉檀の方便もて機に随いて接引^{しやういん}す。是を以て多く定まらざるなり。

3.332 略して別教の菩薩の位を明かす

第二に略して別教の菩薩の位を明かすとは、今、『瓔珞經』に約して、七種の位有るを明かす。一に十信、二に十住、三に十行、四に十迴向、五に十地、六に等覺地、七に妙覺地なり。

3.3321 十信位を明かす

一に十信位とは、十信の名義は、具さに『大本』に在り⁷⁶。今明かす。別教の菩薩は因縁、仏性、常住の三宝を信じ、無量・無作の四諦を知り、慈悲の^{539a}四弘誓願を起こす。天魔・外道・二乗の^{はば}阻むこと能わざる所なり。名づけて信心と為す。若し『涅槃經』に五行を明かすに望まば、即ち是れ戒聖行・定聖行なり。生滅の四諦を修すれば、慧聖行は界内の見惑を伏す。即ち是れ十

75 具さには『四教大本』に在り『四教義』卷第九 (T46, no. 1929, p. 752, a25-b20) を参照。

76 具さに『大本』に在り『四教義』卷第九、「初明十信心者、一信心、二念心、三精進心、四慧心、五定心、六不退心、七迴向心、八護法心、九戒心、十願心」(同前、p. 753, a16-18) を参照。

信心の位なり。

問うて曰う。別教の菩薩は、既に無量・無作の四諦を縁じて菩提心を発すれば、何が故に生滅の四諦の観を修するや。

答えて曰う。別教の菩薩は初心に無量・無作の四諦の理を信ずと雖も、界内の煩惱の障は重ければ、必ず須らく前に此の惑を断ずべし。故に先に生滅の四諦を修して、以て心を調うるなり。

3.3322 十住位を明かす

二に十住の位を明かすとは、即ち是れ習種性の十解⁷⁷の位なり。入理般若を、名づけて住と為す⁷⁸。言う所の入理とは、偏真に真入⁷⁹し、円真の理に似入するなり。若し『大涅槃經』に望まば、正しく是れ無生の四真諦観を修す。今明かす。此の十住は皆な是れ体仮入空観を修し、偏真の慧を發し、界内の見思を断じ、一切智・慧眼を得、相似の中道の解を生ず。即ち是れ別教の煖法の位なり。

3.3323 十行位を明かす

三に十行の位を明かすとは、即ち是れ性種性なり。前に十住は既に理に入ることを得るを明かせば、今は理従り行を起こし、十波羅蜜⁸⁰を学ぶ。故に

77 十解 菩薩の階位、十住のこと。真諦の訳語。真諦訳『撰大乘論釈』卷第十一、「願樂行人自有四種。謂十信・十解・十行・十迴向」(T31, no. 1595, p. 229, b22-23)を参照。また、『法華玄論』卷第四、「十住即是十解」(T34, no. 1720, p. 396, a4)を参照。

78 入理般若を、名づけて住と為す 『仁王般若波羅蜜經』卷第一、菩薩教化品、「善覺菩薩四天王 雙照二諦平等道 權化衆生遊百國 始登一乘無相道 入理般若名為住 住生德行名為地 初住一心足德行 於第一義而不動」(T08, no. 245, p. 827, b23-26)を参照。

79 真入 底本の「直入」を『籤録』によって改める。「直字、疑誤。宝地作真為是……云、三十心真証是思議、似証是不思議。義意同也。蓋以約真中論偏円真似」を参照。

80 十波羅蜜 六波羅蜜に、方便・願・力・智の四波羅蜜を加えたもの。『六十卷第華嚴經』卷第二十五、十地品、「十波羅蜜者、菩薩以求仏道所修善根、与一切衆生、

十行と名づく。『大涅槃經』に望まば、即ち是れ無量の四諦の觀門を修す。今明かす。十行は從空入假觀を修し、恒沙の無知を斷じ、道種智・法眼を得。界内の正使は已に尽き、相似の中道の解は、漸く更に分明なり。即ち是れ別教の頂法の位なり。

3.3324 十廻向位を明かす

四に十廻向の位を明かすとは、即ち是れ道種性なり。解行の心合し、因を廻して果に向かい、法界に順入す。故に廻向と名づく。『大涅槃經』に望まば、應に是れ無作の四諦の觀を修すべし。今明かす。此の菩薩は中道正觀を修す。中道の似解はうた轉た更に明を増し、能く無明を伏し、相似の一切種智・仏眼を得。即ち是れ別教の忍法の位なり。

問うて曰う。既に別教の位を明かせば、何を用て煖・頂・忍に対せんや。

答えて曰う。別教の十地は、既に四果・三十心の位に対すれば、豈に煖・頂・忍に対せざらんや。

問うて曰う。此れは既に是れ別教の菩薩なれば、何ぞ無作の四諦の觀門を修することを得ん。

答えて曰う。此の義は交加關涉⁸¹して易からず。具さには『大本』に在り⁸²。豈に即ち決を求む可けんや。

3.3325 十地位を明かす

是檀波羅蜜。能滅一切煩惱熱、是尸波羅蜜。慈悲為首、於一切衆生心無所傷、是羼提波羅蜜。求善根無厭足、是毘梨耶波羅蜜。修道心不散、常向一切智、是禪波羅蜜。忍諸法不生門、是般若波羅蜜。能起無量智門、是方便波羅蜜。求轉勝智慧、是願波羅蜜。諸魔外道不能沮壞、是力波羅蜜。於一切法相如實說、是智波羅蜜。如是念念中具足十波羅蜜。是菩薩具足十波羅蜜時、四攝法、三十七品、三解脫門、一切助阿耨多羅三藐三菩提法、於念念中皆悉具足。」(T09, no. 278, p. 561, b26-c9)を参照。

81 交加關涉 錯雜して關連すること。

82 具さには『大本』に在り 『四教義』卷第九 (T46, no. 1929, p. 755, a17-b20)を参照。

五に十地の位を明かすとは、即ち是れ聖種性の位なり。初地に入る従り即ち真を發し、明らかに仏性平等、法界自体を見、諸仏の功德^{539b}を住持・出生し、一切衆生を荷負するに堪能す。故に名づけて地と為す。若し『大涅槃經』に望まば、応に是れ分は無作の四諦の理を証して、二十五三昧を得るを、諸三昧王と名づくべし。五行具足して、次第に十功德を成じて、十地入る。多に恐らくは意は此に在るなり。

3.33251 初地

今明かす。此の十地の菩薩は若し初地に登らば、即ち真の中道第一義諦を証し、双べて二諦を照らし、心心寂滅し、自然に薩婆若海に流入し、能く無明住地を断じ、分に種智・仏眼を得、如来の真・応の両身を得て、十方に化を行ずるなり。始め初地従り乃ち十地に至るまで、皆な無明を断ず。但だ以て位に約せば⁸³、分ちて三道と為す。初地を見道と名づけ、二地より六地に至るを修道と名づけ、七地従り已去を無学道と名づく。地論師の言わく、「二地より七地に至るを修道と名づけ、八地已去を無学道と名づくるなり」⁸⁴と。初地の菩薩は、五行具足す。恐らくは是れ初め⁸⁵の功德なり。余の九種の功德⁸⁶は、或いは

83 但だ以て位に約せば 『籤録』には、「但以位約」について、「位約、広本作約位。為是」とある。『四教義』卷第十には、「但以位約、分為三道」（同前、p. 755, c10-11）とあるが、甲本、乙本には、「位約」を「約位」に作る。訓読はそれに従う。

84 地論師の言わく、「二地より七地に至るを修道と名づけ、八地已去を無学道と名づくるなり」『金光明經文句記』卷第四にも、「地論以初地為見道、二地至七地名修道、八・九・十地為無学道」（T39, no. 1786, p. 137, a25-26）を参照。

85 初め 底本の「初地」を『籤録』の指摘と、『四教義』卷第十、「初地菩薩五行具足。或是初功德也。余九種功德或可對九地」（T46, no. 1929, p. 759, a16-18）によって、「初」に改める。

86 余の九種の功德 『南本涅槃經』卷第十九、光明遍照高貴德王菩薩品、「善男子。若有菩薩摩訶薩修行如是大涅槃經、得十事功德、不與声聞・辟支仏共、不可思議、聞者驚怪、非内非外、非難非易、非相非非相、非是世法、無有相貌、世間所無。何等為十。一者有五。何等為五。一者所不聞者而能得聞、二者聞已能為利益、三者能斷疑惑之心、四者慧心正直無曲、五者能知如来密藏、是為五事」（T12, no. 375, p. 730, a8-15）、同、「爾時、光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言、如仏所說、若有菩薩修大

九地に対す可し。言う所の無明、別の見惑⁸⁷を断ずとは、『大涅槃經』に云わく、「此れ自り已前を、皆な邪見の人と名づくるなり」⁸⁸と。是れ則ち三藏・通教の三乗の人は、皆な未だ此の理を見ざるが故に、邪見の人と名づくるなり。以て大士は須菩提を誨す。「六⁸⁹師は是れ汝の師なり。天魔・外道は一手もて諸の勞侶を作す」⁹⁰と。意は此に在るなり。乃至、別教の十信・三十心は、此の惑を伏すと雖も、既に未だ断ずること能わざれば、猶お是れ無明、別の見を成就し、諸の菩薩を誨す。意は或いは此に在るなり。

二に二地従り六地に至るを修道と名づくとは、別惑の三界の愛を断ず。『大智論』に明かすが如し。迦葉は甄迦羅⁹¹の琴の声を聞いて、自ら安んずること能わず。迦葉の云わく、「三界五欲は、我れ已に断じ竟わる。此れは是れ菩薩の淨妙の功德の生ずる所の五欲なり」⁹²と。故に是の事に於いて、自ら安

涅槃、悉作如是十事功德。如来何故唯修九事、不修淨土」(同前、p. 752, c5-7)を参照。

87 無明、別の見惑 無明惑と別教の見思惑のこと。『法華玄義』卷第四下、「十地即是聖種性。此皆入別教四果聖位、悉断無明・別見思惑」(T33, no. 1716, p. 732, a18-19)を参照。

88 『大涅槃經』に云わく、「此れ自り已前を、皆な邪見の人と名づくるなり」『南本涅槃經』卷第七、四倒品、「迦葉菩薩白仏言、世尊。我從今日始得正見。世尊。自是之前、我等悉名邪見之人」(T12, no. 375, p. 648, a27-28)を参照。

89 六 底本の「大」を『再校維摩經玄義』の頭注に記される宋本によって改める。

90 「六師は是れ汝の師なり。天魔・外道は一手もて諸の勞侶を作す」『維摩經』卷上、弟子品、「若須菩提不見仏、不聞法、彼外道六師、富蘭那迦葉、末伽梨拘賒梨子、刪闍夜毘羅胝子、阿耆多翅舍欽婆羅、迦羅鳩駄迦旃延、尼犍陀若提子等、是汝之師」(T14, no. 475, p. 540, b29-c3)、同、「供養汝者、墮三惡道。為与衆魔共一手作諸勞侶、汝与衆魔、及諸塵勞、等無有異」(同前、p. 540, c8-10)を参照。

91 甄迦羅 kaṅkara の音写語。千万億の数の名。

92 『大智論』に明かすが如し。迦葉は甄迦羅の琴の声を聞いて……此れは是れ菩薩の淨妙の功德の生ずる所の五欲なり」『大智度論』卷第十、「如屯崙摩甄陀羅王、捷闍婆王、至仏所。彈琴歎仏、三千世界皆為震動、乃至摩訶迦葉不安其坐」(T25, no. 1509, p. 135, c15-17)、同、卷第十一、「大迦葉言、三界五欲不能動我。是菩薩神通功德果報力故、令我如是、非我有心不能自安也。譬如須弥山、四辺風起、不能令動。至大劫尽時、毘藍風起、如吹爛草」(同前、p. 139, b27-c2)、同、卷第十七、「如声聞闍陀羅王屯崙摩彈琴歌声、以諸法実相讚仏。是時、弥山及諸樹木皆動。大迦葉等諸大弟子、皆於座上不能自安。天須菩薩問大迦葉、汝最耆年、行頭陀第一。今何故

んずること能わず。色・無色愛に例することも、亦復た是の如し。此の經の大士は、須菩提を訶して云わく、「煩惱に同じて、彼岸に到らず。八難に入り、難無きことを得ず」⁹³と。意は此に在るなり。故に二地従り六地に至るは、通じて修道と名づけ、此の別惑を断ずるなり。今、義を以て推す。

3.33252 離垢地

二に離垢地は、即ち別教の欲愛を侵断するを、斯陀含向と名づく。

3.33253 明地

三に明地は、即ち是れ別教の斯陀含果なり。

3.33254 炎地

四に炎地は、即ち是れ別教の阿那含向なり。

3.33255 難勝地

五に難勝地は、即ち是れ別教の阿那含果なり。^{539c}別の愛欲を断じ尽くすなり。

3.33256 現前地

六に現前地は、即ち是れ別教の阿羅漢向なり。別の色・無色愛を断ずるなり。

不能制心自安。大迦葉答曰、我於人天諸欲、心不傾動。是菩薩無量功德報聲、又復以智慧變化作声、所不能忍。若八方風起、不能令須弥山動。劫尽時毘藍風至、吹須弥山令如腐草」(同前、p. 188, b9-17)、同、卷第四十二、「如摩訶迦葉聞菩薩伎樂、於坐處不能自安。諸菩薩問言、汝頭陀第一。何故欲起似舞。迦葉答言、我於人天五欲中、永離不動。此是大菩薩福德業因緣變化力、我未能忍。如須弥山王、四面風起、皆能堪忍。若隨風風至、不能自安」(同前、p. 367, c29-p. 368, a5)を参照。

93 此の經の大士は、須菩提を訶して云わく、「煩惱に同じて、彼岸に到らず。八難に入り、難無きことを得ず」『維摩經』卷上、弟子品、「若須菩提入諸邪見、不到彼岸。住於八難、不得無難。同於煩惱、離清淨法。汝得無諍三昧、一切衆生亦得是定」(T14, no. 475, p. 540, c4-7)を参照。

3.33257 遠行地

七に遠行地は、即ち別教の阿羅漢地なり。別の色・無色愛を断じ尽くす。故に此れ従り無学道と名づくるなり。

問うて曰う。此の四果に対するは、何れの経論に出ずるや。

答えて曰う。別教に断伏を明かして、四果に対す。経論多く同じからず。諸大乘の法師の用うる所も亦た異なる。地論師は通教に位を判じて云わく、初地に見を断じ、二地に欲愛を断じ、三地に色愛を断じ、四地に無色愛を断ず。地論師は通宗に位を判ず。三地に見を断ずるを須陀洹と名づけ、四地従り六地に至るを斯陀含と名づくるを用うる事有り。第二依⁹⁴の法師の七地より九地に至るを、阿那含と名づく。第三依の法師の十地・等覚を阿羅漢と名づく。是れ第四依の法師に、三地に見を断ずると、四地を斯陀含と名づけ、五地を阿那含と名づけ、六地を阿羅漢と名づくと言う事有り。『仁王経』に四地に見を断ずると五地を斯陀含と名づけ、六地を阿那含と名づけ、七地を阿羅漢と名づくるを用うる事有り⁹⁵。是の如き等の異説は同じからず、定んで依る可き事難し。今、義を以て推するに、此の四果に対するを作すなり。一往、便に似たるも、既に的文無ければ、仏意は知り難し。苟も執するを須いざるなり。

問うて曰う。何が故に解釈は定まらざるや。

答えて曰う。已に前に釈するが如し。

3.33258 不動地

八に不動地は、即ち是れ別教の辟支仏地なり。地論師の云わく、「此れ従り無学道を明かす。未だ^{まさ}的しく何れの経論に出ずるやを知らず。但だ八地に無生忍を得るのみ。寂にして而も常に用い、用いて而も無相なり。無功用^{むくゆう}の

94 第二依 依り所とすべき四種の人を四依（人の四依）といい、その第二をいう。四依は、四依大士、四依菩薩ともいう

95 『仁王経』に四地に見を断ずると五地を斯陀含と名づけ、六地を阿那含と名づけ、七地を阿羅漢と名づくるを用うる事有り 出典未詳。

心は、自然に法界の無明惑・色習⁹⁶を断じ尽くすなり。

3.33259 善慧地

九に善慧地は、無明は稍薄く、心習^{ひや}を断じ尽くす。慧は転た分明にして、善く実相に入るなり。

3.332510 法雲地

十に法雲地は、慈悲・智慧猶お大雲の若し。慈悲は普く一切を浴し、皆な法雨を雨らす。慧雲は能く十方の諸仏の説く所の法雨を持ち、十品の無明を断ずるなり。

3.3326 等覺地を明かす

六に等覺地とは、即ち是れ辺際智^{へんざいち}⁹⁷は満じて、重玄門⁹⁸に入る。若し法雲に望まば、之れを名づけて仏と為す。妙覺に望まば、金剛心菩薩と名づく。亦た無垢地菩薩と名づく。三魔⁹⁹は已に尽きて、余に一品の死魔在ること有りて、無明の習を断ずるなり。

問うて曰う。前の通教は何の意ぞ等覺の仏を辨ぜざるや。

答えて曰う。界内の習気は尽くし易し。故に法雲を開きて等覺を出だすを須いず。

問うて曰う。別教の經論は、何が故に有る處に法雲^{540a}を明かすの後、更に金

96 無明惑・色習 『籤録』に、「言無明惑色習者、無明当位所断正使、色習謂前位所断白煩惱之余氣也。或可無明即色煩惱習耳。宝地牒文并大本無惑字」とあるのを参照。

97 辺際智 「辺際」は、究極の意。「辺際智」は、等覺の菩薩の智慧。辺際智が満ずれば、妙覺=仏の智慧となる。『法華玄義』卷第五上、「等覺地者、觀達無始無明源底、辺際智満、畢竟清淨。断最後窮源微細無明、登中道山頂、与無明父母別、是名有所断者、名有上士也」(T33, no. 1716, p. 734, c9-12)を参照。

98 重玄門 きわめて深遠な哲理の意。『老子』、「玄之又玄、衆妙之門」に基づく。支道林『大小品対比要抄序』(『出三藏記集』卷第八所収)、「是故夷三脱於重玄、齐万物於空同」(T55, no. 2145, p. 55, a17-18)を参照。

99 三魔 煩惱魔・陰魔・死魔・天子魔の四魔のうち、死魔を除いたものを指す。

剛の等覺有りや。自ら經論有りて、止ただ十地の行滿ちて便ち仏果を成ずるを明かすのみ。南北の法師は、此れを諍あらそいて紛ふんぬん紜す。

答えて曰う。更に等覺を立つるは、未だ定めて礙げと為さず。然る所以は、『華嚴經』に、法雲十地の功德・智慧を明かし、用て仏に比くらぶるは、爪の上の土を大地に方くらぶるが如し¹⁰¹。若し爾らば、一品の無明を説くと雖も、実に品を説く可からざるなり。何を以て後心の菩薩の無功用道は、其の疾ときこと風よりも甚だしく、一日の間に能く無量の品の無明の障惑を破すことを知ることを得んや。何に況んや『瓔珞經』に等覺地を明かし¹⁰²、百千万億劫に於いて、重玄門に入り、凡夫の事を倒修す¹⁰³るをや。是の故に法雲地を開き、更に金剛心等覺仏を立つるは、理に於いて失無し。若し一品に無量品の無明有りと知り、法雲の無礙の智を用て即ち尽くさば、復た何ぞ等覺地を開出することを須いんや。

3.3327 妙覺地を明かす

100 比 底本の「此」を『再校維摩經玄義』の頭注に記される宋本によって改める。『四教義』卷第十には、「所以然者、華嚴經明法雲十地功德智慧、用此比於仏、如爪上土方於大地」(T46, no. 1929, p. 759, c8-10)とある。

101 『華嚴經』に、法雲十地の功德・智慧を明かし、用て仏に比ぶるは、爪の上の土を大地に方ぶるが如し 出典未詳。

102 『瓔珞經』に等覺地を明かし 『菩薩瓔珞本業經』卷上、賢聖學觀品、「仏子。摩尼宝瓔珞菩薩字者、等覺性中一人、其名金剛慧幢菩薩。住頂寂定、以大願力住寿百劫、修千三昧已入金剛三昧、同一切法性、二諦一諦一合相。復住寿千劫學仏威儀、象王視觀、師子遊歩、復修仏無量不可思議神通化導之法。是故一切仏法皆現在前、入仏行處、坐仏道場、超度三魔。復住寿万劫化現成仏、入大寂定等覺諸仏、二諦界外非有非無、無心無色、因果二習無有遺余。現同古仏但有応名、現諸色心教化衆生。現同古昔諸仏常行中、大樂無為而生滅為異、而実非仏、現仏神通常住本境」(T24, no. 1485, p. 1012, c27-p. 1013, a9)を参照。

103 百千万億劫に於いて、重玄門に入り、凡夫の事を倒修す 類似の表現に。『法華文句』卷第九下に、「善入出住者、九次第定是善入、師子奮迅是善出、超越是善住、通藏意也。從初地至十地名善入、十地入重玄門、倒修凡夫事名善出、妙覺遍滿名善住、別意也」(T34, no. 1718, p. 126, c16-20)とある。

妙覺地者とは、金剛の後心、^{ろうねん}朗然たる大覺の妙智は、源の無明習を窮め尽くすを、^{しょうねん}解脫と名づく。蕭然として累無く、寂にして而も常に照らすを、妙覺地と名づく。常住の仏果に一切の仏法を具足するを、菩提果と名づく。四徳の涅槃を、名づけて果果と為す。

問うて曰う。定めて金剛の智を用て無明を断ずと為すや、妙覺を用て無明を断ずと為すや。

答えて曰う。『涅槃經』に云わく、「断ずる所有りとは、^{うじょうし}有上士と名づく。断ずる所無しとは、無上士と名づく」¹⁰⁴と。

問うて曰う。何が故に『勝鬘經』に、「無明住地は、其の力最大なるも、仏菩提智の能く断ずる所なり」と云う¹⁰⁵や。

答えて曰う。若し別を用て通を接せば、十地・等覺は即ち是れ仏の菩提智なり。所以は何ん。『涅槃經』に、「九住の菩薩は、名づけて聞見と為す。十住の菩薩は、名づけて眼見と為す。仏性を見ると雖も、了了ならず。無礙道と惑と共に住するを以ての故に、了了ならず。諸仏如来は、了了に見る」と云う¹⁰⁶とは、即ち眞の解脫は蕭然として累外なるが故に、了了なり。

104 『涅槃經』に云わく、「断ずる所有りとは、有上士と名づく。断ずる所無しとは、無上士と名づく」『南本涅槃經』卷第十六、梵行品、「云何無上士。上士者、名之為断。無所断者、名無上士。諸仏世尊無有煩惱、故無所断。是故号仏為無上士。又上士者、名為諍訟。無上士者、無有諍訟。如来無諍。是故号仏為無上士。又上士者、名語可壞。無上士者、語不可壞。如来所言、一切衆生所不能壞。是故号仏為無上士。又上士者、名為上座。無上士者、名無上座。三世諸仏更無過者。是故号仏為無上士。上者、名新。士者、名故。諸仏世尊体大涅槃無新無故。是故号仏為無上士」(T12, no. 375, p. 711, c12-22)を参照。

105 『勝鬘經』に、「無明住地は、其の力最大なるも、仏菩提智の能く断ずる所なり」と云う『勝鬘經』一乘章、「如是無明住地力、於有愛数四住地、其力最勝、恒沙等数上煩惱依、亦令四種煩惱久住。阿羅漢、辟支仏智所不能断、唯如来菩提智之所能断。如是世尊。無明住地最為大力」(T12, no. 353, p. 220, a11-15)を参照。

106 『涅槃經』に、「九住の菩薩は、名づけて聞見と為す……諸仏如来は、了了に見る」と云う『南本涅槃經』卷第二十六、師子吼菩薩品、「善男子。復有眼見、諸仏如来、十住菩薩眼見仏性。復有聞見、一切衆生乃至九地聞見仏性。菩薩若聞一切衆生悉有仏性心不生信、不名聞見」(同前、no. 375, p. 772, c6-9)、同、卷第二十五、師子吼菩

若し別教もて義を明かさば、初歡喜従り即ち仏菩提の智を用て初品の無明を断じ、乃至、等覺の後心に、方に乃ち断尽す。

若し円教もて義を明かさば、即ち是れ初發心住に、仏菩提智を得て、初品の無明を断じ、乃至等覺の後心に方に乃ち断尽す。

3.333 別教の位に約して淨無垢称の名を釈す

第三に別教の位に約して淨無垢称の名を釈すとは、維摩は既に是れ一生補處の大士なれば、即ち是れ法身にして、等覺の金剛心に居す。無垢¹⁰⁷の菩薩の位なり。仏性の理は顯わるるが故に、名づけて淨と為す。別惑の正習は俱^{540b}に尽き、無明の余習は、譬えば微煙の若く、有なりと雖も無なるが如し。故に無垢と名づく。辺際智は満じて、内に深理に称い、外に用くこと無方なり。法界は平等にして、縁に赴き化を行ずるが故に、名づけて「称」と為す。故に「淨無垢称」と云うなり。豈に彼の三藏・通教に淨無垢称の義を辨ずるに同じかる可けんや。所以に教迹^{きょうしやく}現同す。補處の位とは、三藏・通教の三乘を訶せんが為めに、別教の大乗の菩薩を摂受するなり。

維摩經玄疏卷第三。

薩品、「善男子。如汝所問。十住菩薩以何眼故、雖見仏性而不了了。諸仏世尊以何眼故、見於仏性而得了了。善男子。慧眼見故、不得明了。仏眼見故、故得明了。為菩提行故、則不了了。若無行故、則得了了。住十住故、雖見不了。不住不去、故得了了。菩薩摩訶薩智慧因故、見不了了。諸仏世尊斷因果故、見則了了。一切覺者、名為仏性。十住菩薩不得名為一切覺故、是故雖見而不明了」(同前、no. 375, p. 772, b13-22)を参照。

107 無垢 無垢地のこと。『菩薩瓔珞本業經』卷下、釈義品、「汝先言義相云何者、所謂十住、十行、十向、十地、無垢地、妙覺地義相」(T24, no. 1485, p. 1017, a6-7)を参照。